

論文の和文要旨

論文題目	昭和期における谷崎文学の創作手法
氏 名	蕭 幸 君

研究傾向の時代的動向に影響されたのだろうか、これまでの谷崎研究は作家論、作品論、テーマ研究、方法論といった流れで進められてきた。方法論に関する谷崎研究は、昭和五十年代に入ってから多様化され、さらに物語学の隆盛に伴い、作品の「語り」や物語性の形態と構造に注目した研究が多くなされてきた。そんな中で、個々の作品に対する追究や議論が豊富であったが、創作手法の全体像を明らかにするものは見あたらない。作品構造の「完全なる組み立て」にこだわって創作された谷崎の作品であるがゆえに、一つのテーマ、あるいは一つの方法をだけ取り上げて分析を行うのではその内部構造の全体像が明確に見えてこない。そのため、一つの作品に用いられた複数の手法がどのようなかたちで係わり合い、その相互関係が作品にどのような影響を与えるかをぜひとも見る必要がある。私見によれば、昭和期の谷崎文学はことごとく共通した複数の手法を「組み立て」で創り出されたものと思われる。本論文は、昭和期における文壇の動きと読者層の変化という外在的な環境を視野に入れ、谷崎の創作手法の変遷を追い、創作のあらゆる側面から検証を行い、円熟した昭和期の作品群が如何にして創り出されたかを明らかにする試みである。考察するに当たって、分析の例として取り扱う作品は「卍」「吉野葛」「蘆刈」「春琴抄」「少將滋幹の母」「鍵」「夢の浮橋」の七作である。必要に応じて他の作品を取り上げる場合もある。

以上の考えに基づき、本論文は序章を含め五つの部分によって構成されている。

序章は、昭和期の谷崎文学の様相を俯瞰するものである。ここでは、谷崎文学はどの作品を境に円熟期を迎えたかを明らかにしていく。これまでは、谷崎文学の転換期に当たる作品として「痴人の愛」か「蓼喰ふ蟲」かのいずれかが挙げられているが、ここで谷崎の後期作品にしか見出せない特徴と様相を示し、それに基づき、転換期に当たる作品は「卍」と「蓼喰ふ蟲」の二作とするべきである、と提示した。

第一章では、後期の谷崎文学への変貌を促したきっかけはなにか、その変貌はどのようにして遂げられたかについて言及する。筆者がここで明らかにしたのは、谷崎が創作に置く際に、必ずと言っていいほどある創作上のサイクルに沿って創作を続けてきたという事実である。数回にわたり繰り返して訪れた創作の行き詰まりが十数年にも続くなか、谷崎はかなり多くの手法を模索し、様々な文学路線に挑戦していたと見える。この時期に書かれたある実験的な作品が芥川から批判を受けたため、彼は芥川と論争を交わすこととなった。おそらく、これが谷崎の創作手法が変貌を遂げるきっかけとなったのではないかとと思われる。この論争を境に、小説という形態が如何にして完成されうかが谷崎の創作を支える重要な観点となったのである。昭和期の作品は、もっぱら「饒舌録」において述べられている「凡そ文学に於いて構造的美観を最も多量に持ち得るものは小説である」という彼の言葉の実践である。彼はその言葉通りに、文体・語り・人物像・ストーリー・ジャンル・文学路線といったあらゆる創作の側面に多様性を持たせ、その小説の構造に「最も多量」な要素を持ち込んだのである。それはすなわち歴史、伝説、神話、古典、演劇などの一部を切り取って作品の素材の一部とする手法（以下、＜素材物語＞の導入と呼ぶ）と、謎めいた構造を取り入れ、作品の物語を幾通りにも作り上げていく手法（その現象を＜物語の共存＞と呼ぶ）によって果たされる。

第二章からは本論に入っていくが、そこで考察するのは、谷崎の作品に登場してきた人物像の描かれ方である。多様性が持たされたその人物像の描かれ方に、後期の谷崎文学に見られる重要な特徴がある。谷崎の作品に見られる人物像の多様化は以下に挙げられた四つの側面において行われている。まず、多くの視点による饒舌な描写で人物像の分裂（多様化）をはかる。素材物語が多く導入された作品の場合では、それらの持つイメージが登場人物のイメージ創りに使われる。このほか、登場人物は性格の分裂、分身を設けるといった形で多様化されている。この人物像の多様性は登場人物に変化をもたらすだけではなく、作品の内容にも変化を与えていることが指摘できる。

第三章では、文体・語り・ストーリー・ジャンルなどの側面における多様化と、その多様性が作品にどのように機能するかについて言及する。文体の多様化では、紀行文めいた文体、手紙文のバリエーション（女性の手紙文、男性の手紙文、老人の手紙文）など、いくつか異なる文体を同時に一つの作品に導入したり、カタカナとひらがなの使い分けで表現してみたり、導入した素材物語の持つ文体（古典の場合、古文や漢詩、和歌そのままの文体）が取り入れられる。語りでは、複数の語り手が設けられ、同一の出来事についてそれぞれ異なる視点からそれを語り、時にそれらの語りが矛盾し合う場合もあり、また語り手自身が物語の矛盾点を指摘し、疑問視することもある。そのため、作品に不透明な部分が残され、語られた物語が複雑な様相を呈し、多種多様な物語が創り上げられていく。それに加え、これまで言及されてきた谷崎文学の特徴である悪の美、女性崇拜・母性思慕・サドやマゾといったエロティックな要素、笑いなどがふんだんに作品の至るところに鑲められて、読み手の注意を惹いている。これらの手法の多様化が直接ストーリーの多様化に結びつき、作品の主題までもが常に変化せざるを得ない状況となる。そこで行われた文体の多様化、素材物語の導入、語り手の複数化が作品の内容を豊富にしていく反面、いくつかの問題点も生じさせたものである。それは、ジャンル、主題が混乱した状態に陥り、物語の流れが乱れ、作品自体が支離滅裂な状況に追い込まれることである。この状況はやや

ともすれば、作品を崩壊させてしまうのだが、谷崎がそれを防ぐために執った処置は、探偵小説に見られる謎解きやミステリアスな性質を持つ伝説・神話などを含めた謎めいた構造を利用することである。例えば、謎解きを利用した場合は、語り手がいろいろと疑問を持ちかけて読み手が読み進めてきた物語の流れを壊していく。その結果、読み手は新たな物語の流れを作っていくかざるを得ない状況に追い込まれる。このような行為が絶えず繰り返され、作品の流れは形成されては壊され、壊されてはまた作り出されてゆくという動きが要請され、その度に新しい物語が生み出されていくが、作品に解明されない点が存在する限り、作られた物語は常に不安定な状況に置かれることになる。生み出されたこれらのいくつかの物語が一つの作品において、共生共存していく、この現象が「物語の共存」である。以上が第三章において明確にしたことである。

第四章は結論の部分に当たるが、そこで新たに付け加えていくことがある。これまではもっぱら作品の内部構造を論じてきたが、ここでは、作品の外在的な要素について付加して言及する。三章で提起された要素のほか、谷崎はその昭和期の作品群に二つの大きな文学傾向を意図的に取り入れている。一つは当時の文壇で重要視されている「私小説」の手法であり、もう一つは新興文学として人気を博した大衆小説（探偵小説、歴史小説など）の手法である。谷崎は、読者が作品から自分の実生活を読みとれるように様々な工夫を凝らしている。同時に、同じ作品に物語性を持たせ、歴史や謎めいた構造をも取り入れている。こうして、その作品は相容れないと思われる「私小説」と「大衆小説」との性質を持ち合わせることになる。この時期の谷崎の創作手法に見られる実験性も極めて強い。女語りを取り入れたり、会話を表示するカギ括弧を取り外して地の文と会話文の融合を試みたり、視力を失った盲人の視力に擬して、漢字の使用を極端に減らしその感覚を表現したり、地の文を完全になくし、日記体だけで小説を創り上げたりなど、枚挙に遑がない。そこに共通しているのは、多様性を帯びているということである。結論は以下の通りである。

そもそも錯綜体である小説の構造をあらゆる創作の側面を多様化して創り出された谷崎の後期作品は、なんらかの主題を見出して読むこともでき、そこに作家の実生活の痕跡を見つけることもでき、あるいは、スリルやミステリーを満喫することもできるばかりでなく、創作的な面から見ても、かなりの収穫が得られるはずである。なぜなら、それらの作品群には、自然主義作家において見出せる人間と風景との調和、刻印された作家の実生活や人間性の様態、リアリティに対する追求が見られる。あるいは虚構を目指す作家の「物語性」「幻想性」「語り」、神話や伝説の世界が持つ「異境」、推理小説の「推理性」「犯罪性」「謎解きの楽しみ」、むろん、エロティシズムや笑いも含まれている。作品の内部において、文体・語り・人物像・ストーリー・ジャンルなどの側面を多様化し、作品をとりまく外部環境の傾向を取り入れ、創作の方向性をも多様化している。これらの食欲なほどの豊饒性が昭和期の谷崎文学に無限な読みの可能性をもたらしている。欧米作家の中では、このように一つの作品において多様な手法が盛り込む例は少なくない。谷崎と同時期の作家の中では、それぞれ違う作品に異なる手法を試みる例をいくつも見られる。しかし、谷崎と同様にほとんどの作品（昭和期）に多様な手法を一つの作品に集中して用いる作家は果たしてどれくらい存在しているのだろうか。谷崎という作家を位置付ける場合、このような問いは決して無駄ではないことを、本論文において確認できたのではないと思う。